

函館と、子どもの貧困。

特集



〈連載〉

中川大介
西野鷹志
庄司証
米田哲平／小宮伸二
夏井俊介／近藤緑
押野友美／ふくだたくま
中村ひでのり

TAKE FREE

@h

53

巻頭 [ハム・コヤシ]

2017年春号 (第53号) 2017年3月20日発行 (季刊)
発行人・池田 誠 編集人・中村ひでのり



(一財) 北海道国際交流センター (HIEC)
040-0054 函館市元町 14-1 TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail: volut@hifor.jp http://www.hifor.jp/volut/



当ホテルは、トリップアドバイザーの
「朝食のおいしいホテル 2016」にて
日本全国第4位に選ばれました。



函館の上質な旅を演出します。

函館国際ホテル



HAKODATE KOKUSAI HOTEL

●宿泊のご予約

0138-23-0591

●ブライダルのお問合せ

0138-23-6161

〒040-0064 北海道函館市大手町5-10

http://www.hakodate-kokusai.jp

特集 函館と、子どもの貧困。 p4

Yさんの場合●ある子どもの体験談 p6

Kさんの場合●ある母親の体験談 p8

データから見る
函館市の「子どもの貧困」の現実
宿村篤由 p10

各地に広がる「こども食堂」、
その出発点
近藤博子 p12

「人とのつながり」が貧困の根を断つ
百合拡泰 p13

日本でも、
「ファイナンシャル・インクルージョン」を
広げるために p14

田代絢子 p16

あなたは一人じゃない
函館・青少年自立援助ホーム「ふくろうの家」から

H I F インフォメーション I N F O R M A T I O N p19

人と水と空と森の話
アラスカの森、フクシマの川
中川大介 p20

昔の子ども、今どきの子ども
英語が変わる。
庄司 証 p23

連載 小宮伸二／近藤 緑／米田哲平／夏井俊介
ふくだたくま／押野友美／中村ひでのり p24

【ライカはゆく】 特別寄稿／第5話
焼きおにぎり
西野鷹志／文・写真 p28

本誌設置場所
FROM EDITOR・奥付 p30

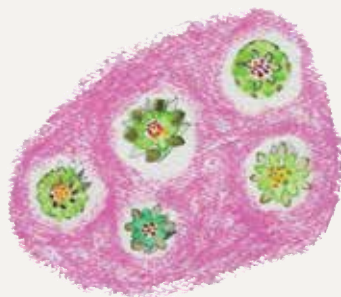


Illustration by Tomoka Kunitate

FROM
EDITOR

子どもの頃、鼻水を拭いた袖がカビカビになっていた、ズボンの穴をアップリケでふさいでいた子がいた。いつも同じ服を着ていたり、ちょっと臭かったりする子がいた。高度経済成長期で、全て「右肩上がり」の時代。でも僕の住んでいた田舎に、その波はまだ及んでいなかった。

身なりは貧しくても「こころの錦」と歌った水前寺清子の「いっぼんどここの唄」がはやった頃だ。そこいらに貧しさがあって、食べていくのにも苦しいのに、家族3世代で何とかしたり、地域で支え合う社会があった。

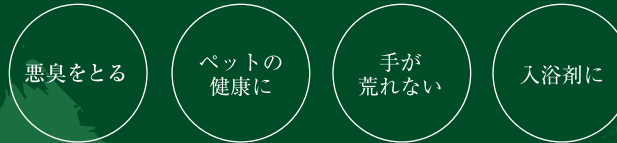
今は鼻水を垂らした子も見かけない。みんなきれいな服を着て、楽しそうに遊んでいる。「貧困」は、消えたのだろうか？ 子どもたちは懸命に貧しさを隠しながら、助けを求めて苦しんではいないだろうか。

家族、地域、学校…。子どもの成長を支えてきた「つながり」が崩壊する中で、「見えない貧困」が生まれている。大人である私たちが今、まずすべきこと、それは、貧困を「可視化」することであるように思う。

(一財) 北海道国際交流センター(HIF)
事務局長 池田誠

約35億年前の
地球がつくったバイオ液、
オピスエール。

プロバイオティクスの力。



人間にも、ペットにも、植物にも安全な商品です。

500ml/¥1,200 (税別)

※只今、キャンペーン期間として500mlを¥700で提供しています。

※用途に応じて原液～200倍程度に薄めてご使用ください。



※プロバイオティクスとは、有益微生物を利用する方法のことです。



有限会社オオクラ

〒040-0064 函館市大手町18-9 Tel. 0138-27-0658 Fax. 0138-83-2570
E-mail: t-takada@ohkura-co.jp

函館と、子どもの貧困。

子どもたちの「貧困」が、見えにくくなっている。

着るものを持っていて、それなりに食べていて、

携帯電話なんかを持っている。

そんなふうでも目を凝らせば、

子どもたちが懸命に背伸びしている姿が見えることがある。

学んだりいろんな経験をするためのお金が乏しくて、

安定した環境、頼れる大人が周りにいない。

暴力で意志をねじまげられたりもする。

一歩間違えば、

どこまでも転げ落ちて行きそうな世界に生きる子どもたち。

それは決して、遠い地域のことじゃない。



Yさんの場合／ある子どもの体験談

●女子高生が体験した過酷な日々。

Yさんの両親が離婚し、父が家を出て行ったのはYさんが小学5年の夏休みだった。その日から、母と3歳年上の兄、そしてYさんの3人の生活が始まった。母はそれまでの昼間の勤めの他に、夜、コンビニ等でのアルバイトを掛け持ちし、朝から夜遅くまで働いていたという。父から養育費がもらえなかったことは社会人になってから知った。

家計にゆとりがないことは、子供だったYさんにも感じられた。それまであったクリスマスや誕生日のプレゼントももらえなくなった。洋服や学用品なども必要最低限に限られ、日々の暮らしに贅沢はできない。ただ、欲しいものを同級生が持っているのに自分は買ってもらえない、という寂しさはたえられた

ないとあきらめました」

高校入学と同時に、近くの飲食店でアルバイトを始めた。兄は就職し、家を離れた。Yさんの本当の戦いはそこから始まることになる。

高校1年の終わり頃から、母が家に帰らないようになった。2、3日戻らないこともめずらしくない。どこへ行っていたのかと聞くと、夜中の弁当作りの仕事をしているという答えが返ってきた。でも、帰らない日が1週間や2週間ということになり、高校生のYさんにも、なんとなく察しがついた。母に恋人ができたのだ。やがて母はめったに家に帰ってこなくなった。光熱費の督促状が届き、学校では授業料が滞納になっていると告げられた。

「最初は自分の身に起きていることに現実感がなくて、呆然とするだけでした。でもなんとかしなきゃと覚悟を決めたんです」
もう母に頼るのはやめて、自

が、親の離婚を友人に知られることだけはどうしてもいやだったという。

「当時、私の周りには親が離婚している家庭が少なく、それを知られるのがとても恥ずかしかったんです。だから母から苗字は変わないと聞かされた時は、ほっとしました」

中学生になっても、生活は大変だった。父がいなくなった頃から素行が悪くなった兄は、高校に入るとそれがエスカレートし、妹のYさんにさえ暴力を振るうことがあった。

家計がかなり追いつめられた状況なんだと思い知った二つの出来事がある。塾へ行きたいと頼み、通い出した数ヶ月後、「やはり授業料が高いからやめてほしい」と母に言われたこと。も

分の力で生活しようと、アルバイトの時間を増やし、夜遅くまで働いた。誰かに相談すればよかったのかも知れない。疎遠ではあるが、母の実家には祖父や祖母も健在だ。教師に相談することだつてできたかも知れない。

「でも、人に知られるのがいやだったんです。アルバイト代でギリギリやっていけそうだったし。自分で生きていこうと強く思いました。学校もちゃんと通って卒業してやろうと。母の居所を探すこともしませんでした。彼女に対する怒りがモチベーションだったと思います」

前日にアルバイト先でもらったパンを朝食にし、お昼は学食でご飯だけを買ひ、持参した缶詰やコンビニの総菜などで済ませ、夕食をとることはほとんどなかった。月に一度くらい、夜帰宅すると、留守中に母が帰って来た気配があり、食卓の上にコンビニで買った菓子パンが置かれていたりしたが、顔を合わ

うひとつは高校受験の際、公立しか行かせられない、私立は受験しないほしいと言われたこと。受かったら公立に行くから私立も受験だけはさせてほしいと頼み込み、結局両方合格したのだが、どうしても自分の受けた私立高校に行きたくて、公立

「事情を知っている高校時代の友人や、バイト先の人たちもいろいろ助けてくれました。そんな人たちと知り合ったから、やってこられたのかも知れません」



PROFILE／函館市生まれ。30代女性。独身。高校卒業後、市内の企業に就職し現在に至る。

せることはなかった。

そんな暮らしを送っていたある時、休暇で帰省し状況を知った兄が母を探して呼び出し、親戚にも連絡をとった。どういことだと詰め寄る兄や祖母の前で、ごめんなさいと泣きながら母は詫言びたが、その後、祖母が毎月お米を届けてくれるぐらいで、状況はさほど変わらなかった。

「不思議に思われるかも知れませんが、なんとか生活できたんですよ。貯金だつてきたぐらい。学校とアルバイトの毎日で遊ぶ暇もなかったし、欲しいものも思いつかなかったし」

Yさんは成績もよく、高校3年の11月には就職も内定し、卒業と同時にそれまで貯めたお金で運転免許も取得した。

「今思うと、母も精神的に追いつめられていて、辛かったんですね。兄が独立したのをきっかけに緊張の糸が切れたんだと思います」

そう語るYさんだが、社会人

高校の受験発表を見に行った帰り道、不合格だったと母に嘘の電話を入れた。

「あの時、母は私が合格したことをもう知っていました。電話口で、ごめんね、おめでとうと言って泣いていました。あの時に、やっぱり公立へ行くしか

特集

函館と、
子どもの貧困。



になってからも、離婚後一度も会ったことのない父からの突然の金の無心や、体調を崩して入院し職場を半年間休職するなど、さまざまな困難があった。30代半ばを過ぎた今、仕事も充実し、ようやく当時に冷静に振り返ることができるようになった。母は当時の相手と再婚し、今は連絡を取り合い、家に遊びに行く関係だ。母も義父も当時のことをことあるごとに詫言び、優しく接してくれる。

「事情を聞いた人たちから、よく自暴自棄にならないでやれたね。学校をやめたり、夜の仕事を簡単に稼ごうとか思わなかった?」と言われます。でもそれだけは絶対に格好悪いなって思っていたんです。こんな状況でも自分でなんとかやっていたって言いかけた。生まれつき気の強い性格なんですね」と笑う。

※Yさんには、名前を伏せることを条件に取材に応じていただきました。

Kさんの場合／ある母親の体験談

●「家の購入」から狂い始めた家庭の闇車。

「息子や娘たちには、とても辛い思いをさせて、申し訳なかったと思っています」

そう語るKさんの3人の子どもたちは、昨年、一番末の長女が高校を卒業し、みんな社会人となった。50歳を過ぎた今、自分の結婚生活を振り返ると、それは「借金の返済」に追われ続けた20年間だったと彼女はいう。

Kさんが最初の結婚をしたのは20歳の時。2歳年上で会社員だった夫に多額の借金があることを知り、2年ほどで離婚する。間もなく知り合った3歳年上の男性と再婚したのが23歳。自営で建築関係の仕事をし、20代にしてはかなりの収入があった。「前の夫とのこともあったので、彼がとても頼もしく思えたんです。よく外食にも出かけたし、

海外旅行へも行きました」

やがて2人の子どもにも恵まれ、それまで借家住まいだったKさん夫妻は自分たちの家を持ちたいと思い始める。

Kさんの実家は、市内でも人氣のある住宅地にあった。ただし土地は借地。祖父の代から住み続けている家に、病気を患い早くに仕事をリタイアした父と、スーパードでパートとして働く母が2人で暮らしていた。この場所に家を建て替え、いつしよに暮らすのはどうだろうとKさんが提案し、夫も同意した。両親に相談すると喜んでくれたという。

とはいえ、Kさん夫婦にもそれほど蓄えがあるわけではなかった。それは両親も同じこと。最低限の頭金を用意すると、手

元に貯金はなくなっていたが、夫の収入があれば充分返済していけると甘く考えていた。

Kさんが29歳の時に、実家の跡地に大きな2世帯住宅が出来上がった。生まれ育った土地での新たな生活。両親も、Kさんの子どもたちをかわいがってくれた。その頃、TVのニュースはバブルが弾けたと騒いでいたが、周囲も羨むような暮らしの中でKさんの耳には届かなかった。3人目の子どもが生まれたのもその頃だった。

生活に変化が現れたのは2年目あたりからだ。夫の仕事が減り始め、家にいることが多くなった。もちろんそれは収入が減ることを意味する。目に見えて家計は苦しくなったが、返済は待つてはくれない。家とク

特集
函館と、
子どもの貧困。



ルマのローン、借地代、光熱費や保険料など、毎月30万円ほどが生活費とは別に消えていく。母親がパート代から援助してくれたが、それでも家計は苦しかった。夫との口喧嘩も増え、ある時、激高した夫に体を押され、食器棚のガラスで腕を何針も縫うけをした。

そんな状況をなんとかしようと、夫は函館での仕事をあきらめ、札幌や東京などの知人を頼り、出稼ぎに行くようになり、年に数度しか家には戻って来ないという生活が始まった。育児と家計のやりくりはKさんの仕事だった。まず、銀行に相談し返済計画を見直した。極力無駄な出費を抑え、新聞をやめたり、保険を解約したりと、とことん切り詰めた。もちろん、そのしわ



「お金の使い方」に対する意識が私も夫も甘かったんです。それで子どもたちに苦労をさせてしまった」と語るKさん。

PROFILE／函館市生まれ。50代女性。3人の子育てを終え、現在は母親と2人暮らし。

寄せは子どもにも向かうことになる。

「子どもたちが学校へ通い始めてからは、ますます家計は苦しくなりました。それでもそれを周囲に気づかれるのがいやで、洋服やおもちゃ等、無理をして買い与えたりしました。でも取り繕うところを間違えていたのかも知れません。塾や習い事には行かせてやれなかったし、家族で旅行したこともありません。結局、就学支援を申請し、

給食費の援助も受けました」

子どもたちの前では笑顔を絶やさず、不安を感じさせないようにと振る舞ったが、なんとなく状況を察したのか、あれが欲しい、これがしたいということもあり言わなくなった。

長男が大学へ行きたいと言い出した時には、あきらめて欲しいと説得した。結局、夫の母が入学金を都合してくれて、奨学金の他、アルバイトをして生活費と学費をなんとかするという

条件で入学させた。が、それもうまくいかず、1年足らずで退学することになった。

「次男が高校生の時には、お金の工面がつかず、修学旅行に行かせてあげられなかったんです。別に行きたくなかったから気にしなくていいと言われたのが辛かったですね」自分の子どもを経済的な理由で修学旅行へ行かせられなかった。それが今も悔やまれてならないというKさん。

「私の実家は裕福ではありませんでしたが、特に不自由もなく育ってきました。欲しいものは買ってもらえたり、行きたい学校へも行けました。小さな頃はさまざまな習い事もさせてもらえたんです。それが当たり前だと思っ育てきたんです。だから自分が親になっても、そうなるだろうと根拠もなく考えていて、うまく言えませんが自分の置かれている状況としつかり向き合っていなかったように

も思います。自分も外へ出てもっと働くとか出来たかも知れない。でも、夫の収入が増えてきて、そのうちどうにかなるんじゃないかって、甘いことを考え続けて責任逃れをしていたのかも知れません。それが結果的に、子どもにも辛い思いをさせることになってしまった。もっと現実を直視していれば、何か解決方法はあったのかも知れないと、今は思っています」

東京で働き、ほとんど帰省することもない夫とのいざこざはその後も絶えず、夫婦の関係も冷えきってしまった。昨年離婚が成立した。必死で守り続けようとした自宅は、結局手放すことになった。

数年前に父が亡くなり、現在Kさんは、仕事をしながら年老いた母と2人で市内のアパートに暮らしている。

※Kさんには、名前を伏せることを条件に取材に応じていただきました。

データから見る

函館市の「子どもの貧困」の現実

宿村篤由さん ● 函館市子ども未来部子ども企画課

2015年度（4月時点）の函館市の生活保護受給者は、人口千人あたり47人。全道平均（同）の31・6人、全国平均（同）の17人を大きく上回り、経済的に困窮している世帯が他の地域より多いことがわかる。

市内での15年の婚姻件数は1189件、離婚件数565件。結婚した人が2人いれば、離婚した人が1人いる計算だ。ひとり親家庭の経済状態は厳しく、子どもたちが置かれた状況は各種指標から浮き彫りになる。

低所得のひとり親家庭に支給される「児童扶養手当」の受給率（人口のうち手当受給者の割合）は13年度で1・49％と、全道平均1・13％、全国平均0・84％を上回る。経済的に苦しい

家庭に給食費や修学旅行費などを支給する「就学援助」を受けた小中学生の割合（認定率）も、13年度で28・2％。全国平均15・68％よりはるかに高く、全道平均23・06％も上回る。

子どもたちが厳しい状況にあるのは、北海道全体に言えることなのだ。山形大学の戸室健作准教授の調査によると、12年度の都道府県別の「子どもの貧困率」（18歳未満の子どものがいる世帯のうち生活保護費以下の収入で暮らしている世帯の割合）は、高い順に①沖縄37・5％②大阪21・8％③鹿児島20・6％④福岡19・9％⑤北海道19・7％。つまり北海道は都道府県の下から5番目だ。

このような中、函館市は、子

ども・子育て支援のより一層の充実を図るため、07年に福祉部内（当時）に「子ども未来室」を設置し、12年には「子ども未来部」を設けて、子どもの貧困対策にも力を入れている。

これまで、子育て世帯への経済的支援策として、子どもの医療費の助成、保育所等の保育料の軽減、就学援助などに取り組み、ひとり親世帯の父母の就労や経済的自立を促すため、

経済的自立に有効な資格を取得する場合などに給付金を支給する母子家庭等自立支援給付金事

「子どもの貧困率」

18歳未満の子どものいる世帯のうち生活保護費以下の収入で暮らしている世帯の割合

1. 沖縄県 37.5%
2. 大阪府 21.8%
3. 鹿児島県 20.6%
4. 福岡県 19.9%
5. 北海道 19.7%



業を行ってきた。また、15年度には市独自の事業として、子どもが小・中学校に入学する際の入学準備給付金

函館と、
子どもの貧困。



● 特集
制度の創設や学童保育所の保育料の軽減、16年度からは生活困窮世帯の中学生対象の学習支援に取り組んでいる。今後も17年度に子どもの生活実態調査の実施、18年度に新たな給付型奨学金の支給開始を予定しており、市子ども未来部子ども企画課の宿村篤由課長は「子育て世帯を取り巻く環境は厳しさを増してきているが、どのような状況にあっても、子どもの健やかな成長を支える仕組みをつくることが私たちの役割」と語る。
社会課題として大きくクローズアップされている子どもたちを取り巻く環境。貧困の連鎖を断ち切り、子どもたちの将来を考えていくうえでも、官民挙げて、社会全体で子育てをしていく仕組みが必要になる。

「子どもの貧困に係る各指標の推移」

生活保護率(%)

	2012年度	13年度	14年度	15年度	16年度	
函館市	4.60	4.71	4.72	4.70	4.63	2015.16年度のみ4月時点、他は年度平均(国、道含む)
全道平均(%)	3.13	3.16	3.14	3.16		北海道「生活保護実施概要平成27年度版」他
全国平均(%)	1.67	1.70	1.70	1.70	1.69	厚生労働省「被保護者調査」

児童扶養手当受給率(%)

	2012年度	13年度	14年度	15年度	16年度	
函館市	1.53	1.49	1.48	1.46	1.42	各年度4月末時点 〔受給者／人口(外国人含む)＊100〕
全道平均(%)		1.13				内閣府作成資料
全国平均(%)		0.84				内閣府作成資料

就学援助認定率(%)

	2012年度	13年度	14年度	15年度	16年度	
函館市	28.3	28.2	27.7	27.2	26.1	各年度4月時点
小学生(%)	27.6	27.3	26.6	26.3	25.4	文部科学省 「平成25年度就学援助実施状況等調査」
中学生(%)	29.7	29.9	29.6	28.9	27.3	文部科学省 「平成25年度就学援助実施状況等調査」
全道平均(%)		23.06				
全国平均(%)	15.93	15.68				

保育所等利用世帯階層の割合(%)

	2012年度	13年度	14年度	15年度	16年度	
函館市	32.3	32.0	32.0	34.4	30.8	各年度4月1日時点
(内訳)生活保護受給世帯(%)	7.6	7.8	8.2	6.5	5.5	
市民税非課税世帯(%)	24.7	24.2	23.8	27.9	25.3	

各地に広がる「こども食堂」、その出発点

近藤博子さんに聞く

●「気まぐれ八百屋だんだん」店長

「気まぐれ八百屋だんだん」の「だんだん」とは、近藤さんの出身地・出雲地方の方言で「ありがと」を意味する。ものを食べる上で大切な「菌」の健康を維持する事に携わりながら、近藤博子さんは人が生活する上で最も重要なことは「食」だと感じ、自ら安心できる食材を多くの人に提供したいという思いを強めた。2007年に歯科衛生士を辞めて、自然食品を扱う友人の店を手伝い、週末だけ野菜の配達を行うようになった。

「健康・菌・食をキーワードに活動をしようと思ったのがスタートでした」。翌年、閉店した居酒屋の店舗を使って八百屋を始め、葉っぱの元気な大根や真っ赤な

トマトなどを並べ、ご近所さんが集まるようになった。店には小上がりもあり、おばあちゃんが座って「ひとり暮らしは大変だね」「うちの息子が、嫁といろいろあってね」などと話し合ってくる。お年寄りだけではなく、子育て中の母親も集まり、人のたまり場になっていった。

その次の年、高校生だった自分の娘が数学の勉強でつまずいた。塾に行くにもお金がかかる。部活動もあって時間が無い。困って娘が先輩の生徒に相談すると「夏休みに教えてあげるよ」と二つ返事で引き受けてくれた。せっかくだから近所の子たちも」と声をかけると、たちまち大勢集まった。それが、1時間5

00円の学習支援「ワンコイン寺子屋」の始まりだ。子どもたちは宿題を持ってきて、大人たちがそれぞれに合った支援をしてくれた。夏休みが終わっても続けてほしいと要望が上がる。



こんどう・ひろこ／島根県生まれ。東京都大田区在住。歯科衛生士として30年間以上働いた後、2008年、同区内で無農薬野菜と自然食品の店「気まぐれ八百屋だんだん」を開店。12年、大田区でこどもが1人入っても大丈夫な食堂を始めた。「こども食堂」の全国第1号とされる。

「私は勉強を教えないので、おやつを出す。サツマイモをふかしたり、お餅を焼いたり、冷やしたキュウリを用意して、子どもたちに喜ばれたんです」。

それぞれができることをして、ニーズが、みんなの力によって形になっていったのだ。新聞記事で紹介され、一緒に支援をするボランティアを募集中と呼びかけたら、大田区以外にもさまざまな人が集まった。そこで、放課後に子どもたちが宿題をする場所を八百屋に設けた。それ

が「みちくさ寺子屋」。子どもが無料で学んだり、遊んだりする場になり、さらに多くの人が集まってきた。

人が集まるといろいろな化学反応が起きて、さまざまな要望が生まれる。英会話もやりたい、数学もやってみたいと大人たちが言いだし、そこから大人の「学び直し」も始まった。「おしながき」ができて、毎日いろいろな講座が行われるようになったのがこの頃だ。

「お母さんが精神的な病気で、

朝もなかなか起きられず、朝夜のご飯でバナナ1本という子どもがいるんだよね。地域の小学校の副校長から、そんな話を聞いたのは10年のこと。副校長は、自らおにぎりを作って食べさせているという。「先生、忙しいでしょ。うちのお店で、みんなでご飯と具だくさんのみそ汁食べるのはどうですか」。

そう提案すると副校長は喜んだ。早速4人ほどの支援者が集まり、食材や資金の打ち合わせを始めたが、すぐにスタートできずにいるうちに、その子は児童養護施設に入ってしまった。

何もできなかった悔しさをかみしめながら、しつかり準備して12年8月、「こどもが1人入っても大丈夫な食堂」をス

タートさせた。これが「こども食堂」の始まりだ。毎週木曜日開催で料金は子ども100円、大人500円。予約は必要なく、1人暮らしのサラリーマンやお

年寄りなどさまざまな人が集まる。お金が払えない子もいるが、理由は聞かない。「大人になってから何か考えることができたらい」と近藤さんは思う。運営資金にと寄付してくれる人も現れた。

子どもも大人も、居場所があれば安らげる。こども食堂は集まった人たちが気軽に話し、ちよつと相談もできる場所だ。

「貧困の問題は、見えづらい。服も普通で、ジャンクフードばかり食べているために、やせ細ってはいない子もいる。だから、向き合って話すことから分かることがある」と近藤さん。子どもの笑顔が真ん中にあつて、いつも開いていて、「横のつながり」があり、ふらっと来ることができ、抱えている荷を下ろせる場

所。いろいろな世代が集まり、ジャンルも何でもありの、小さな

社会。そんな場所づくりが今、全国に広がっている。

「人とのつながり」が貧困の根を断つ 百合拡泰さんに聞く

●函館弁護士会登録弁護士

厚生労働省は2012年の調査の結果、国内の18歳未満の16・3%が、国民の年収の中央値の半分に満たない「相対的貧困」の状態にあると発表した。子どもの6人に1人が貧困状態にある。このデータは、社会に大きな衝撃を与えた。子どもがいる現役世帯のうち、大人が2人以上いる世帯の相対的貧困率は12・4%だが、大人が1人の場合は54・6%という高さ。ひとり親の貧困率の高さが際立っている。

函館ではどうだろう。総務省

の15年の調査によると、全国の中核市の19歳以下の生活保護受給者の割合（保護率）を比べると、函館市は4・70%とトップだ。ただ、「この数字だけで地域の貧困を基礎づけるのは時期尚早です」と百合拡泰さんは言う。「生活保護が受給できる人がいても、さまざまな手段で受給を制限している自治体があります。そうすれば保護率は下がりますが、十分な貧困対策がなされていないことになるんです」。こうした状況があれば、弁護士会は自治体と戦う覚悟で貧困対

特集



函館と、
子どもの貧困。



ゆり・ひろやす／函館出身。2016年1月に函館で日本弁護士連合会が開いた「貧困問題全国キャラバン」N函館地域とともに子供に寄り添う「子どもの貧困」対策に必要なものは何かの運営に従事。函館青年会議所に所属し、「戦略的な広報創出委員会」の副委員長を務める。

策に取り組んでいるという。

「今、声を大にして言いたいのは、貧困に直面する人たちに、公的な手当をしっかりと知ってもらうことです。中学校修了までの子どもを扶養している人に支払われる「児童手当」、ひとり親家庭などの生活の安定と児童の福祉のための「児童扶養手当」。日本弁護士連合会の貧困問題対策本部では「児童扶養手当ホットライン」(電話相談)などを通じて、こうした手当が必要とする人たちに適正に配分

されるよう、力的に取り組んでいる。

「弁護士に相談すると多額の支払いが請求されると思うかもしれないませんが、そんなことはありません。法テラスの制度を使うことができます。

ば、同一の案件について3回まで無料で弁護士に相談できます」と百合さん。市役所や弁護士会でも無料相談を行っている。

自身も経済的に厳しい生活を体験している。「司法試験を受ける前に、東京で宅配のアルバイトをしていたところは夜の6時から働いて、月20万をもらい、朝にビールを飲むのだけが楽しみという毎日。自分が貧しいかどうか分からずに、懸命に働いていた自分がいたんです」。貧困かどうか、当人は分からない

もの。周りの人が公的制度に関する知識や問題意識を共有し、当人をサポートすることが重要なのだ。さまざまな人とつながることが貧困の根源を断つこと

になるが、人間関係が希薄な現代社会では、それが危うい状況にある。「つながりの貧困」をなくしてゆくことが大切なのだ」と百合さんは訴える。

日本でも、

「ファイナンシャル・インクルージョン」を広げるために

田代絢子さんに聞く

●メットライフ財団カントリー・ディレクター、メットライフ生命CSRセネラルマネージャー

大学時代から途上国の貧困問題にかかわり、国内外の企業で働いた経験のある田代さんが、「世界では当たり前なのに、日本では広まらないキーワード」と語る言葉がある。「ファイナンシャル・インクルージョン」だ。日本語訳は難しいが、「あらゆる人々が生涯にわたって、いろ

いろな不安を抱えながらも前を向いて、経済的に健やかに暮らしていける状態になること」という意味だ。

途上国ではマイクロファイナンス(小口金融)機関などが低所得世帯に對して、小口融資などニーズに見合った金融サービスを提供することで自立を促し

ている。そうした金融アクセスの拡大とあわせて欠かせないのが、お金の扱いに関する知識と技術、そして健全な金銭感覚の育成だ。それは貧困に直面する日本の子どもについても言えることであり、大人は子どもを育てながら、「お金の付き合ひ方」を習熟させることが必要なのだという。

「豊かな人生を送るには、身体、健康、精神の健康に加え、『お金の健康』が不可欠です。日本人はお金の話はしたがりますが、きちんと向き合うことが必要なのです」と田代さんは言う。もつとお金の使い方やため方など、さまざまな視点からお金のことを話し合うことが必要、と。

将来に関わるようなお金の決断ができない日本人は多い、という調査結果もあるという。小さな出費を慎重に判断したとしても、大きな出費の判断を誤れば一気に貧困につながる可能性



たしろ・じゅんこ／東京大学在学中にケニアで保健医療の現場を経験し、ビジネスの手法を生かした国際開発の在り方を模索し始める。卒業後、マッキンゼー&カンパニーに入社し、日本・中国・欧州で経営戦略立案などに従事。渡米後、国連開発計画・国際金融公社で途上国貧困層向けビジネスのアドバイザー業務を担当。2014年から現職。

もあつた。田代さんの言う通り、日本にはお金の扱い方について公然と語るのをはばかる文化がある。健全に扱うために必要な知識や技術すら、「浅ましい」とみなされてしまう恐れがある。その結果、金融サービスの知識が普及せず、会社が倒産した、予期せぬタイミングで子どもを授かった、だまされてお金を失ったなどで金銭的に行き詰まった場合、適切な対応ができない可能性があるのだ。

そうした事態に耐えるために

も、「目標を立て、計画し、適切な意思決定を重ねる自律的能力の醸成は欠かせません。そしてこうした能力が、幼少期から日常生活の中で自然に育まれていく仕組みとして、金融教育の果たすべき役割は大きい」と田代さんは強調する。そして、予期せぬことが起きた場合にも適切な対応をするために大切なことを三つ挙げる。一つは、ダメージから回復する強靱(きょうじん)さを身につけること。二つ目は

「子どもたちの将来を考える」と、新しいタイプの金融教育プログラム(※)の実施が必須になってきています。道南にも私たちメットライフ財団の金融教育を広げてゆきたい。ファイナンシャル・インクルージョンの理念を日本でも広げたいと、田代さんは意欲を語る。

人がいることだ。三つめ目は自己肯定感を持つこと。やりたいことができて幸せを感じ、心が満たされているということだ。

※メットライフ財団がセサミワークショップと展開する子ども向け金融教育プログラム「夢をえがき、計画をたて、行動する:みんなで考えるファイナンシャル・エンパワメント」では、子どもと大人が一緒になって、夢を実現するために目標を持ち、計画を立て、行動をしていくことの大切さを学ぶ。お金をどう使い、蓄えるかだけでなく、寄付等を通じて他者と分かち合うことについても理解を深めていくことを目指す。5年間にわたり世界約10か国・地域で展開する予定で、日本では2016年秋に立ち上げ、今年から全国の小学校などで提供を開始。Youtubeとの提携により学校現場でも簡単に取り入れられるMOOC教材は、下記公式ホームページでも無料配信中。

<http://dtd.sesamestreetjapan.org/>

函館と、
子どもの貧困。



あなたは一人じゃない

函館・青少年自立援助ホーム「ふくろうの家」から

特集

函館と、
子どもの貧困。



函館の住宅街の一角、細い通路の奥に三角屋根の「家」がある。玄関口の枯れ木の上、くりくりとした目のウッドクラフトのフクロウが、訪れる人を出迎える。壁には「ふくろうの家」と墨書された縦長の木の看板。ここは貧困、虐待といった環境のなかで育ち、家族と生活することがむずかしい若者を支援す

る「青少年自立援助ホーム」だ。悩み、迷いながら扉をたたく若者たちを支えるスタッフは6人。起居をともにしながら学校や職場へ送り出し、帰って来れば出迎えて、朝夕の食卓を囲む。「いつてらっしゃい」「おかえりなさい」

そんな言葉を、初めてかけられる若者もいるという。当たり前のひと言が、彼らの心には深く響くのだ。

「関係性の貧困」

自立援助ホームは、児童福祉施設を退所したおおむね15歳から20歳の青少

年・少女たちの「居場所」として始まった歴史がある。児童福祉施設にいられるのは高校卒業まで。それ以前でも中卒で働いたり、高校を中退したりすれば退所を余儀なくされる。早ければ10代半ばで「自立」を迫られる子どもたちは、自ら住まいを見つけ、職場を探し、食事を作り、友人を得て生活していかなければならない。

だが、それは往々にして過酷な状況子どもたちに強いる。身体的な虐待、性暴力、育児放棄、言葉の暴力、親の障がいや自死。そうした環境で家族の愛情を十分に受けずに育った子



「関係性の貧困」の問題を指摘するホーム長の竹花さん。

どもたちが、社会のなかで人間関係を築くのは、たやすくはない。仕事や人間関係に行き詰まり、孤独に悩み、苦しみがちな彼らを支えようと、全国各地で市民有志が立ち上げたのが自立援助ホームなのだ。

「ここへ来る子は、対人関係を築くのが難しいことが多い。他者に心を許し、誰かに愛着を持

つという心を培わないまま育った子が少なくないのです」。ふくろうの家を運営するNPO法人「青少年の自立を支える道南の会」の会長で、ホーム長を務める竹花郁子さんは語る。「彼らは常に不安を抱えながら生きています。一生懸命はたらいいて、人との接し方がぎくしゃくしてしまったりして」

社会で困難に突き当たっても、家族や周囲の支援があれば乗り越えられるかもしれない。だが、その「支え」が得られない。貧困という経済的な苦境が思

い浮かぶが、それ以上に深刻なのが「関係性の貧困」（竹花さん）だという。家族や周囲との関係を断ち切れ、孤立した状態で自傷行為に走る子もいる。経済的な貧困は、家族の亀裂を深くして関係を壊し、周囲とのつながりをも困難にして分断状況を加速させる大きな要因ともなる。

あたりまえの暮らしのなかで

ふくろうの家は道内最初のホームとして、2005年に市

民有志が青少年の自立を支える道南の会を立ち上げて開設した。当初は若松町にあったが、08年、現在地に移転した。定員は6人。16年4月から女子専用施設となり、現在は月3万円の利用料を払いながら4人が暮らしている。若者たちは原則として働きながら自活する力を身につける。居室は2階に6部屋。ベッドと机、タンスが備え付けられている。吹き抜けの居間は広々としてグランドピアノがあり、周辺の住民に活動を知ってもらったためのコンサートも開か

れている。

若者たちはここで、本当の家のようにして過ごす。午前7時、皆で食卓を囲む。スタッフが弁当を作って送り出し、帰宅後、午後7時に再び食卓に就く。門限は午後10時、就寝は11時。日中、出かけずに「家」で昼食をとる子もいる。スタッフと病院や役所へ出向き、一緒にテレビを見たり話したり。「当たり前」の暮らしをしながら、人を受け入れ、自分を大切にする気持ち徐徐にもてるようにと、スタッフは寄り添う。

「あなたを一番に」

「何かあっても、あなたを一番に考えているよ。どの子にも平等に、そう伝えることを心がけています」。ふくろうの家で若者を支える女性の一人は、スタッフに共通する思いを語る。「ここは家庭でも施設でもなく、私は親でも教師でもない。しつ



「ふくろうの家」には、子どもたちが安心してくつろげるよう、大きなソファや食卓テーブル、清潔なベッドなども用意されている。

グローバルキャリアサポート函館

HIFが2013年に始めた「グローバルキャリアサポート函館」。「海外留学をして語学力を向上させたい」「海外で働きたい」「国際交流をしてみたい」「海外でボランティアをしてみたい」など海外渡航に関わることで悩みごと、分からないことについて相談にのっています。各国の生活情報や写真、留学に関する細かい手続きの情報など、たくさんの資料を準備しています。海外渡航や留学、海外で働いた経験のある個性豊かなスタッフがいつでも対応しています。短期でも長期でも、海外での経験は必ず、人生において実のあるすてきな経験になるはずです。たくさんの国の人、新しい価値観や習慣との出会いは、日本にいてはなかなか経験できないものばかりです。また、年間を通じて、海外フェアなどの説明会を行うことがありますので希望の方はお知らせください。

こんな方はぜひカウンセリングへお越し下さい。

- 留学など、渡航方法は決まっているけど手続きが分からない方
- 各種渡航方法の詳細が知りたい方
- 海外に行くための準備の方法が分からない方
- 予算に合わせた渡航方法が知りたい方
- 海外の大学などに進学したい方
- 海外で働きたい方
- 海外でボランティアをしたい方



お問い合わせは下記まで

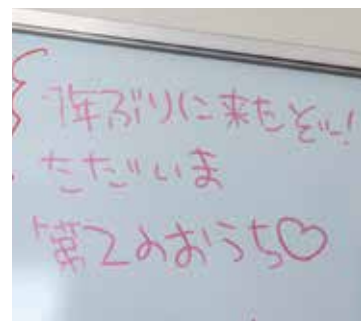


(一財) 北海道国際交流センター(HIF)
040-0054 函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail: global@hif.or.jp

<http://www.hif.or.jp/global>

GLOBAL CAREER SUPPORT IN HAKODATE

函館と、
子どもの貧困。



けや指導のようなことはしませんが、ただ何があってもあなたを大事に思い、あなたに寄り添ってともにいる、そういう存在であると伝えたいのです」昨春から週1回、2泊3日でホームに泊まり込んで入所者と暮らす。子どもたちが約束を守らないことはままあり、注意すると反発するのだが、やがて不安になるのかにじり寄ってきて、謝る

ことはできない子がいる。「無条件に受け入れられた経験が少ないのでしょね。虐待されたりして親を信じ切れない、でも親が好き。そんな気持ちが見えるんです」
若者たちを支える自立援助ホームには、国から措置費が出るようになったが、あくまで民間の施設であり、市民からの会費と寄付が運営を支える原動力だ。16年1月現在で青少年自立援助ホームは全国に115カ所、このうち道内はふくろうの家を含め9カ所ある。児童福祉法の改正でこの4月から、入居対象者は大学などに就学中なら22歳の年度末まで引き上げられることになり、利用者は増えるの見込まれている。役割は大きくなるのだ。

「ふくろうの家」には、居間の壁面、食堂の棚の上、玄関の靴箱、至るところにフクロウの絵や彫刻や版画や陶芸作品がある。全部合わせると68羽にもなるという。智恵の象徴であり、「不苦労」とも読めることから、フクロウは家のシンボルとなった。入居者とスタッフが食事を囲むテーブルが置かれた食堂スペースのカベに掛けられたホワイトボードにあった文字に、ふと目が止まった。退居した女性たちの走り書きだった。

「1年ぶりに来たぞー！ だいま♡ 第二のおうち」
「困難な状況のなかで、よくここへたどりついてくれたと思います。そしてまだまだ、たりつけない子はいるはずですが、竹花さんは力を込める。居間の大きな窓の向こう、庭にモクレンと桜の木があった。春なお遠い雪景色のなかでも、花弁をほころばせるときを待つモクレンのつぼみは、銀色の綿毛をのぞかせて静かに膨らんでいた。



ふくろうの家にはふくろうの絵や木工品があちこちに飾られている。家の様子などを伝える会報も発行されている。



岩手県生まれ。新聞記者。カヌーや溪流での釣り好きが高じて人の暮らしと水とのかわりに興味をもち、仲間と「人と水研究会」をつくって、水辺歩きを続けている。

アラスカの森、フクシマの川

中川大介／人と水研究会

常緑針葉樹の森はほの暗い。湿りけをふくんだ空気が、しつとりと肌にやさしかった。やわらかな陽光が落ちる盛り土の上に、苔むした先住民族の墓石が点在する。なにかつよく心を揺さぶりそうなものの気配を、僕は感じた。人のたましいが、森に還（かえ）るところ―。

米国アラスカ州南東部の港町・シトカ。2005年の春だった。函館を出たときには、まだ冬の気配がかたわらにあった。でも北緯57度のこの地では、紅色の八重桜の花弁が笑いこぼれるようにほころんでいた。暖かな春。遠くカリフォルニアから北米西海岸を北上する暖流のせいだ。人の波がニシンの加工場

へ急ぐ。うららかな4月の空に、ハクトウワシのシルエットが高みへと弧を描いた。

トーテムポールの森で

ずっとここへ来たかった。

シトカは、先住民族の神話が息づく南東アラスカの島々の一角にある。町の名を冠したマツの一種シトカトウヒ、日本のスギによく似たレッドシダー。湿润な気候がはぐくむ国立歴史公園のそれらの木々の間にぼつり、ぼつりと、北米インディアンの部族のひとつ、クリンギット族のトーテムポールが立っている。太い幹に彫り込まれたワシやクマやサケやワタリガラス

の、気味の悪いほど大きな目と口と鼻の穴―。

おれたちはずっとこの場所ですうしている。

この大地と空と海でおきたことなら、なんでも知っている。おれたちに向き合うおまえはなにもだ。

ちっばけな僕をぎょろり見下ろして、彼らは僕の心に語りかけてくる。それはまるで深く濃い森の声だ。

なにもものでもない。彼らのつよいまなざしに目線をそらしそうになりながら、かろうじて

僕は答える。僕はあなたたちの

ように踏みしめるべき大地、ゆるぎない風景を持つていない。あなたがたと向き合えるほど、僕は強くない。

ただ、いつか来たかったんだ。

おなじように厳寒に耐えて生きる動物と人との境目も曖昧だったこの地。極北の自然を畏れながら暮らしてきた先住民族

シトカ国立歴史公園内のトーテムポール。ポールはそれぞれに異なる物語（バックグラウンド・ストーリー）を持つ。2005年4月



「すべてが自然の中に」

僕は長いこと、文明とは「後戻りできないもの」だと思ってきました。

文明は地上にある酸化鉄を還元して鉄を生産し、鋤や鍬や包丁や鍋や車や船や戦車やミサイルをつくりだしました。都市には地下深くまで稠密に、地下鉄や水道管なんかの穴が掘られています。川も巨大なダムで分断され、三面をがっちり護岸されて、体をうねらせる自由を奪われた哀れな龍のようです。海には微細なプラスチックの粒子がただよい、魚たちの体の中に蓄積しています。僕たちの文明は、分解不可能なものを次から次へと生み出す方向へすすんできました。

でも、この世界にはかつて、自然のなかに戻ることができるものがあつたんですね。僕は写真のトーテムポールを見つめな

がら、現代の僕たちの文明が、あのシカのいる場所からはるか遠くへ離れてしまったことを思っていたのです。

星野さんは、この写真を収めた著書「森と氷河と鯨 ワタリガラスの伝説を求めて」（1996年、世界文化社）で、クイーンシャーロット島で出会ったハイド族の男性の言葉を書いています。森のトーテムポールを「美術品」として持ち去ろうとする「文明国」の人々にあらがってきた彼は、星野さんにこう言うのです。

「その土地に深く関わった霊的なものを、彼らは無意味な場所にまで持ち去ってまでしてなぜ保存しようとするのか。私たちは、いつの日かトーテムポールが朽ち果て、そこに森が押し寄せてきて、すべてのものが自然の中に消えてしまっているのだ。そしてそこはいつまでも聖なる場所になるのだ。なぜそのことがわからない



先住民族の墓地。アラスカ州シトカの森のなかにあった＝2005年4月

の人びとはそれぞれの家系（クラン）の「祖先」として動物たちを崇敬した。その姿を刻み込んだトーテムポールを見るために、僕はここへ来たかった。やがて色彩を失い、朽ち果てて森に飲み込まれる木柱たちを―。

僕にそう思わせた写真があるんです。僕はトーテムポールのいちばん上にいるワタリガラスに告げる。いまはもうこの世にいない星野道夫というアラスカを愛した写真家が、南東アラス

カのクイーンシャーロット島で撮った一枚です。針葉樹の森のなかで、ハイド族のトーテムポールが折れ、倒れ、苔むし、朽ち果てて、森に還ろうとしていました。そのかたわらで、1頭のオジロジカが首をのぼして草を食んでいるのです。札幌での星野さんの遺作展でその写真を見たときに、不思議な思いが僕をとらえたのです。

人のつくりだしたものが、自然のなかへ還ることができるんだ。

のか」

おまえたちはどうしたいの
だ。ワタリガラスが僕に問う。
おまえたちはおまえたちの文明
がいつか消え去り、自然のなか
へ還ることができる日が来るの
を願っているのか。

ワタリガラスは、北海道にも
冬鳥として飛来する世界で最も
大きなカラスだ。アラスカの多
くの先住民族の創世神話の主人
公であり、いたずらが大好きで、
隠されてきた「光」を盗みだし、
太陽、星、月を空にちりばめて、
この世界を創りだしたとされて
いる。はるか昔、ユーラシア大
陸から北米大陸へわたったモン
ゴロイドの人びとが、そうした
ワタリガラスの伝説を携えて、
氷河期の終わりに北米大陸を南
下していったのかもしれない。
星野さんはそう考えて、アラス
カでワタリガラスの伝説を追っ
たのだ。

ワタリガラスの問いに、僕は
答えることができない。僕たち

の「便利で豊かな暮らし」は、

多くの分解不能なものに支えら
れている。「すべてのものが自
然の中に消えてしまう」ことが
できれば、なんと心やすらかに
生きられるだろう。でも、それ
はもはや難しいことだ。

あれから8年後に訪れた福島
県浪江町の請戸川の風景を、い
ま僕は思い出す。

原発事故で全町避難となり、
人の気配がいつさい消えた川
に、秋サケが長旅を終えて帰っ
ていた。回帰数や、産みつけた
卵から生まれた稚魚の放射能濃
度を調べようとしている研究者
と一緒に、荒涼とした風景のな
かを歩いた。立ち入りが規制さ
れている区域内だ。河畔の空間
線量は高く、長時間とどまるこ
とはできない。

原発事故前には秋サケを捕る
漁業者やサケを買う市民にぎ
わった河畔は、静寂が支配し、
車の残骸が転がっていた。「沈
黙の川」。そう呼びたくなる痛

ましい光景だった。

サケたちは捕獲が
行われなくなった川
を懸命に上り、自然
産卵を終え、力尽き
て骸(むくろ)となっ
ていく。だが、彼ら

の産み付けた卵は、
遺伝子を傷つけ、消
えゆくまでに長い時間がかかる
物質の影響を受けてしまったか
もしれない。それは、私たちの
社会が生みだし、ばらまいたも
のだ。

一枚の紅葉

「沈黙の川」の河畔で、木々
の葉はいつもの秋と変わらず、
赤に黄に染まっていた。足元に
落ちた一葉の朱の鮮やかさに思
わず拾おうとして、僕は手を止
めた。この葉も、放射能で汚染
されているかもしれない。

同じような色鮮やかな赤い落
ち葉が、星野さんの「森と氷河



福島県浪江町の請戸川。人の姿が消えた浅瀬に、力尽きたサケの死骸があつた。2013年12月

と鮭」のなかの写真にある。葉
脈がくつきりと浮き出たその一
葉も、請戸川の紅葉も、同じよ
うに繊細で、同じように清らか
で美しい。僕たちは、自然の美
しさを、そのまま受け取ること
ができない状況をつくりだして
しまった。

アラスカの森を歩いてから、
12年目の春が来る。あの森の
トーチムボールたちは、徐々に
朽ち始めているだろうか。色あ
せてゆくワタリガラスは、多量
の「核のごみ」を抱えながら、原
発を再び稼働させはじめている
3・11後の社会を生きるいまの
僕に、なんと問うだろう。

昔の子ども、
今どきの子ども



第五話

英語が変わる。

庄司 証／函館圏フリースクールすまいる・代表

とあるバラエティ番組で、お
笑い芸人がニューヨークでお使
いをするという企画をしてい
た。その芸人は英語でのスモー
ズな会話ができないということ
で、……いや、日本語すらも怪し
いのだが、現地の方とのやりと
りが独特の雰囲気面で面白く、持
ち前の積極性でミッションもク
リアする、という内容だった。

でも、考えてみると、昔の、お
じさん、やおばさん、も、み
んな似たようなことだったので
はないか。基地や京都などの観
光地以外では、なかなか、外国人
を見ることも話すこともなかつ
ただろう。それでも、必要にせ
まられれば、日本語と、知って
いる英単語と、ジェスチャーだ
けでコミュニケーションをと

り、何とかそ
の場をしのい
きたのだろう。

もちろん、正
しい英語とか、

グローバル化の流れを考える
とそれなりのビジネス英語も
必要なのだろうが、根本的な
ところで、「伝えよう」「伝えて
やる」という気構えを持てるか
どうかなのではないか、と思っ
てしまう。

日本の英語教育は、戦後、中
学校で英語を学習することに
よって大衆化していった。しか
しその一方で、「受験英語」と
揶揄されるように、入試に占め
る英語の重要性が高く、自分の
思いや気持ちを相手に伝えるも
のとしての英語が生かされる機



会があまりに少ない実状があつ
た。どうしてもコミュニケーション
よりテストが重視されが
ちで、受験になると、正解の表
現を用いることが求められて
きた感がある。

今、そんな英語教育が変わら
うとしている。日本に英語が
入ってきて以来、英語教育にお
ける実用主義と教養主義の対立
構造は解消されてはいないが、
英語が言語である以上は対人関
係を円滑にするツールの一つで
あり、それを使いこなすことで
世界が広がっていくのだ。そんな

な英語を日々楽しく使っていけ
る学びになるような試行錯誤が
続いている。ちなみに学校の学
習内容の基準である「現行学習
指導要領」は、小学校において
「外国語を通じて、……積極的
にコミュニケーションを図ろうと
する態度の育成を図り、……コ
ミュニケーション能力の素地を
養う」という目標を立てている。
そして、10年ぶりに改訂され
る小中学校の「学習指導要領」
で、「英語」が小学5年生から
正式教科になりそうだ。教科書
もあり、成績も付くことになる。
小学校では2020年度から実
施される。

函館市は、1989年に「国
際観光都市宣言」をし、毎年多
くの外国人観光客がやってく
る。今後も外国人と出会う機会
は増えていくかもしれない。そ
の時、「I can't speak
English. (私は英語を話せない。)」と避けるのではなく、意
思疎通を図りたいと思える気持
ちと行動をとれるような「英語
教育」になることを願って

PROFILE

七飯町出身。北海道教育大学大学院修了。在学中から「チーフキリス
ト教学園」の活動に参加し、2012年「函館圏フリースクールすま
いる」設立。不登校や若者の居場所支援などを行っている。

WU-BOOK

●ウー・ブックスの書棚から。

夏井俊介／ウーブックス店主



戦前、日本では多くの対外宣伝誌が製作されている。誌面上には、主に写真やグラフィックを駆使し、直に視覚へと訴えかける強烈な伝播力をもつプロパガンダが展開されていた。

本写真集は昭和11年(1936)12月に朝日新聞から対外宣伝誌として発行されたもので、キャプションは全て英語とフランス語の併記。この年の7月に東京オリンピック開催が決定(日中戦争の為、中止)、海外へ日本の文化をアピールするために製作された中の1冊である。主に年中行事や学校内での子供たちの生活に焦点をあてたもので、当時の暮らしの様子や風俗が写しだされており興味が尽きない。なによりも、頁をめくると、子供たちの精悍な顔つきや姿勢の正しさにすっかり感心してしまい、幾度も「羨(しつげ)」というワードが頭に浮かび上がってくる。教育学者・齋藤孝の身体感覚を巡る一連の著作と併せて見ると面白さが一層増してくる1冊である。



PROFILE

群馬県生まれ函館市育ち。夏井珈琲勤務の傍ら WU-BOOK を経営。古今東西の素敵な本を発掘して紹介している。

WU-BOOK

函館市中道2-48-4

毎週水曜のみ12:00~24:00頃まで営業。



監督・脚本・編集／ラッセ・ハルストロム
出演／柳楽優弥、北浦愛、木村飛影、
清水萌々子、韓英惠、YOU
音楽／ゴンチチ

日本は世界の中でもトップクラスの経済大国だが、実際には、貧困状況にある子どもの数は年々増えているらしい。今、日本の子どもの6人に1人が貧困状態にあると言われている。
この作品は、1988年に実際に起きた事件をモチーフに映画化された人間ドラマだ。母親に置き去りにされた4人の子供たち

が、大人たちに知られることなく、兄妹たちだけで生きていく姿を描いている。2004年のカンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式出品され、長男役の柳楽優弥が日本人初となる男優賞を受賞し、大きな話題となった。
都内のアパートで暮らす母と4人の兄妹たち。彼らの父親はみな別々で、学校に通ったこともない。母親けい子(YOU)がデパートで働き、明(柳楽優弥)が母親代

わりとなつて、兄妹の面倒を見ている。そんなある日、新しい男ができたけい子は、わずかな現金を残して突然家を出ていってしまう。この日から、子供たちだけの漂流生活が始まる。
観客は、ラストシーンに至るまで「誰も知らない世界」で生きている子ども達との時間を共有することになる。そして彼らは我々に投げかける「生きているのは、おとなだけですか?」と…。

「誰も知らない」(2004年)
シネマで
コーヒーブレイク
米田哲平



／函館港イルミナシオン映画祭実行委員長

KOMIYA'S CREATION DIARY

小宮伸二／美術家

2月28日、残る雪に蒼天。

この連載も2年目に突入。いまさらだけど、実は少し気になっていることがある。「創作日記」というような意味のタイトルなのに、この人は何故いつも自分の過去作品を紹介しているのかな?」と思われていないだろうか…。

制作中のものについて書くとき毎回同じような記述になってしまうし、そもそも、過去現在を問わず発表した“様々なヴァリエーションのアート作品”を紹介して欲しいという依頼で、タイトルや日記風体裁は、見本に添付されていたものにそのまま乗っかったもの。その時は何も考えてなかったけど、いざ書くとき日記なので読者と季節感はズレるし、そして根本的に上記のような不安が残る。…と言いつつここで、今回はすごく古い作品を紹介。

写真は 1989 年こまばアゴラ劇場でのツベルクリン公演「LESSON II」の舞台美術。100 を超えるパーツがテグスで吊り下げられている。準備は入念にしているが、スタッフの献身的な



協力がなければ実現しなかった贅沢な作品だ。中央下の木枠は、舞台裏と繋がる出入り口で、女性3人が横並びで出てこれる広さがある。

平田オリザさんが僕のことを「世界中に行き場のなくなったアテネの針金師の最後の末裔に違いない」と評してくださったのが思い出深い。

バル街にてアート・バル! 第2弾
水のインスタレーション 4月21日～ はこだて工芸舎

PROFILE

函館市出身。インスタレーションをおもな表現手段とした現代アート作家。海外でもオーストリアを拠点とした東欧各地やアメリカで個展開催、シンポジウムなどにも数多く参加。

近藤さんちの
今日のお昼ごはん



近藤 緑／フードスタイリスト

【具沢山サンドウィッチ】

今、流行る食べ物の必須条件は『SNS映え』するもの、なんだそう。「ふーん…」と言いながら結構影響されているのが何を隠そう私。ちょっと前にそのSNS界を席卷していた具沢山サンドウィッチ(通称、沢サン)は、分厚い卵焼きや鮮やかな野菜が虹のように挟まれて…とゆうかもうはちきれんほどの具沢山ぶりなのだ。これは果たして本当に美味しいの?パンと具材のバランスは?食べにくくない?…次から次と湧いてくる疑問を解消すべく、作ってみましょうお昼ごはん! まずは厚焼き玉子、そして紫キャベツと人参の千切りにアボカドに自家製鶏ハム、春らしく苺とチーズのサラダも用意して、挟む挟む挟む…うん! コレなかなかイケるわ。食べ物も流行も食わず嫌いはいけませんね。まあでも、何事も程たって大事よね。



PROFILE

美大卒業後、フードスタイリストの道へ。女性誌、広告、等の経験を経て、32歳の時、故郷の乙部町へUターン。現在は函館市内を中心にイベント出店や料理教室などを行う。

る。この南京そばがどんなものか、現在のラーメンの原型のようなものだったのかはわからないが、早い時期から中国の食文化に親しんだ函館市民がラーメンのような中国の麺料理を食べ、影響を受けた味が今も引き継がれていると断言する。

話は戻って、よく食べるラーメンの味。札幌に暮らしていた20代の頃は「いいいや私はみそラーメンですよ」と胸をはって答え、30代半ばを過ぎた頃から「しょうゆラーメンですね」となった。40代を過ぎた今は「やっぱり塩かも」と思い始めている。ただ、チャーシューはまだやめられないでいる。

PROFILE

函館市生まれ。地域情報紙記者。食への探求心が旺盛で、旅先で出会うソウルフードが楽しみ。最近は大沼湖畔のキャンプ場で大勢で囲む夕食が好き。

もつと
知りたい、
世界の音楽。

ふくだたくま

一般社団法人ワールズ・ミート・ジャパン

函館モノ語り。

【私のラーメン】

押野友美
ライター

人と言い合いしているのをカウンター越しに店員のおばちゃん聞き、「けんかしい」と私のラーメンにチャーシューを増量した。しっかりとしたモモ肉のチャーシューは歯ごたえたっぷりで、背脂を含んだ塩味のスープ、麺が一体となり、箸がすすんだ。ラーメンメモにはしっかり二重丸がつき、「美味しい。バランス最高」と記されていた。

北海道の「ラーメン」は、1922年(大正11年)、札幌の北大前にあった「竹家食堂」が作っていた「支那そば」と言われている。それよりも前の1884年(明治17年)4月28日の函館新聞(当時)には、華僑経営の市内の西洋料理店「養和軒」が題した広告に「南京そば 一人前十五銭」の文字があ

ラーメンの話題になり、私が函館出身だとわかれると、「やはり、ラーメンは塩ラーメンですか」とよく聞かれる。塩ラーメンと聞いてイメージするのは、澄んだ「清湯(ちんたん)」スープ、中細のストレート麺、メンマ、ワカメ、チャーシュー、麩(ふ)、なると…の具材。おいしそうに麺をすすっているのはなぜか笑顔のおじいさんというイメージだ。

高校生の頃、食べたラーメンの味やおいしさを記すラーメンメモという記録をつけていた。スープよりも麺食い(好き)、チャーシュー好きで、麺といかに合うチャーシューか、ということが私のラーメン評を左右した。なので基本的に注文するのはチャーシュー麺だ。

ラーメンメモの最高点は当時丸井今井函館店の地下にあったラーメン店だった。ある土曜日の放課後、ラーメン好きの友人と丸井に行き、制服姿でラーメン店のカウンターに座った。そろって出てきたチャーシュー麺。さりげなく横目でぞいた友人のラーメンと何かが違う。私のチャーシューが2枚少ない。「チャーシューちょうだい」「嫌だよ」と友

店主の「函バスの後部座席で正義を叫ぶ」⑤

中村ひでのり／本誌編集人

子どもの頃、親や教師から「人には親切にしない」と、誰もが言われ続けて育ったはずだ。ただ「親切」というのは「する側」と「受ける側」の微妙な心情のバランスの上に成り立っていて、実はかなり難しいものらしいということ、けっこうな歳になった今でもまだ完全に理解できてはいない。が、勝手な思い込みや独りよがりな「親切」が、「余計なおせっかい」と呼ばれることは、何度も体験して知っている。

もうすぐ90歳になる僕の父は、昔からこの「余計なおせっかい」を焼く人だった。良く言えば世話好きなのだが、隣近所や職場の同僚、親戚など、見境なく「親切」を押し売りする。本人は良かれと思ってやっているのだからいい。そしてその矛先は、自分の子どもたちへも向かうのだが、この場合、親子であるが故の複雑な感情がからむので、

とてもややこしいことになる。

十数年前に母に先立たれ一人暮らしをする父の様子を見に行くと、腹は減っていないかと訊いてくる。減っていないと答えると、それならお茶でも飲むかと立ち上がり、お茶を。杖をついたヨタヨタ歩きで老人にお茶をいれさせるのは気が引ける。のどは渴いていないからいいとあわてて止めた。そうか、じゃあ珈琲でも飲むかと、また台所へ向かうとする。「のどは渴いていないのでお茶はいらないと言っている人間が、珈琲なら飲みましょう」ということにはならんだらう」という言葉が無理やり飲み込み、いやホントにいいから、とやんわり断る。たいていの人間ならこのあたりで引き下がるのだが、父はそうはいかない。「なぜ飲まない、いいから飲め」と機嫌が悪くなる。これではこちらの血圧が上がって身が持たないので、着いたばかりなのに「そろそろ帰る」と告げる。すると「歩いてきたのか」と訊いてくる。そうだと答えると「私が送ってやる」と言う。いい加減やめてくれと再三言っても聞き入れない車の運転で歩いて10分もしない距離を送ると、健康のために歩くのだと断ると、外は寒い。いいから車に乗れ、と言ってゆずらない。ここまでくると、怒りを通り越して笑ってしまう。五十肩に悩む息子でも、彼にとっては子どもは子ども。常に心配しなければならぬ対象なのだ。

3歳で父(祖父)を亡くし、手本のないまま父親となった彼の不器用な愛情表現は、2人の子どもの親となった僕の中にも、しっかりと刷り込まれているようにも思う。幸い、父ほどの頑固さとしつこさは受け継がずにすんだと、自分では思っているのだが。

PROFILE

北斗市生まれ。本誌編集人の他、ビーバス函館の制作にも携わる。リーヴズ、ハルジオン・ヒメジオン代表。



作家ヘルマン・ヘッセの出身地・カルフを拠点に活動。18人が来日。日本での演奏は初めて。写真/グレートーン



PROFILE

根室市出身。「はこだて国際民俗芸術祭」の制作を担当。といっても事務的なもので、音楽の知識より「安全管理」を優先させているとか。平和が一番。

Time for music.

ドイツから来た「ヘルマン・ヘッセ・バンド」のメンバーは、キリンラガービールが何より好きで、宿やブライベートでは必ず缶が積まれていた。「いつもこんなに飲んでるのか」と尋ねたら、まさか、バカンスだからだよと笑いながら返された。本番は、黒い帽子に赤いジャケットという伝統のコスチューム。マーチングもこなす本格的なコンサートバンドだ。真夏の炎天下、元町公園やペリー広場を何度も往復してくれた。大道芸人と一緒にパレードして欲しいとか、そんな無茶な頼み事も問題なし。メインステージ上で好演してくれた駒大附属苫小牧高校吹奏楽局を新緑にたとえるなら、彼らはまさにいたがし銀。熟練の職人たちだった。

「函館地区は吹奏楽が強い」と聞いたことがある。その影響か、大人になってもジャズファンク、スカ、ラテンといった、ユニークなジャンルのバンドが多いようだ。誰もが「バカンス」を使って、好きな銘柄を異国の民俗芸術祭で見つける。そんな未来が早く日本に来ればいいと思う。

焼きおにぎり

西野鷹志／文・写真

出汁をとっては注ぎ、出汁をとっては注いで135年。京都で一番古い明治初期創業のおでん屋「蛸長」。四条・南座の裏手から近い。

蛸長と染め抜かれたのれんをくぐり、10席ほどのカウンターに落ちつければ、銅鍋からだし汁の湯気が立ちあがっている。

九条ねぎの刻みをたっぷり添えた出汁にひたした、うすく重ねた生湯葉。とろりと柔らかい。京にいる幸せを思う。旬の種もわくわくする。春は、朝堀りの筍。夏、加茂茄子。秋から冬、聖護院大根、海老いも、越前蟹。残念ながら松茸とは一度もご対面したことがない。だが、店の名にあるとおり、明石の蛸を頼まぬならば、店の敷居をまたぐべからず。絶品。わが輩の固くなった頭も名物の蛸を食すれば柔らくなる。

お品書きに裏贅とある。種々の字の天地が引っくり返っている。裏街道の種！？ その日の裏街道の正体は、阿蘇赤牛のローストビーフ。お彼岸のころ、あんころ餅も登場とか。おでん屋のデザート。旧と新が混じりあい、ウィットに富んだ主の心意気が伝わってくる。四代目の河合達也さん語るに、初代からおでん一筋で、家訓は、おでん以外のものに手を出すな、と。

お客さん、終点！と肩をゆり動かされれば、大阪の梅田から途中乗りかえ、下車すべき枚方をはるかに越えて京阪・京都三条駅。あれ、またまた寝過ごした。そこで、三条大橋をふらふら渡り、花街・先斗町に足をふみ入れた。社会人駆けだしのころであった。



蛸長 四代目河合達也さん 2013.5

安月給でも飲めると学生時代の先輩が教えてくれた、7、8人でいっぱいとなる小料理屋「ますだ」。おかみは元芸妓で、「京都に生きる大正の女ーおたかさん」とアサヒグラフ見開き特集に登場した肝っ玉母さん。落ちこんでいると、肩をドスンとたたいて励ましてくれ、嬉しいことがあると、またドスンと肩をたたき喜んでくれる。僕にはお袋代わりみたいだった。若き司馬遼太郎の姿もあった。今も処は昔のままだが、時はうつり店が大きくなれど、おたかさんに会えない。足は遠のくばかり。

蛸長のメには、いつも蛸飯の焼きおにぎりだ。おにぎりに出汁をたっぷりかけ、崩しながらお茶漬けをあげわう。京の旅は蛸長からはじまる。



PROFILE

西野鷹志(にしの・たかし) 東京生まれ、函館育ち。タウン誌・街で「ライカは行く」を17年間連載、2012年・147回で終えた。現在、函館大妻学園理事長。好きなものーフランスパンの皮、ブルゴーニュワイン、フィルムライカM6。

湖 森 へ へ 。 へ

大沼に精通した経験豊富なガイドが
みなさまに「森の愉しみ」をご案内します。
その後は、島巡り遊覧船で
リフレッシュしていただきます。



さわやかな朝の空気と小鳥たちのさえずり
可憐な野花や小動物との出会い、
湖面を渡る風。
「ネイチャーガイド&遊覧船」は、

N A T U R E G U I D E T O U R

【ネイチャーガイド&遊覧船プラン】

出発時間／1日2回▶13:00▶15:00（10分前集合）

森の散策時間60分＋遊覧船30分

散策コース／大沼・小沼周辺をご案内します

料金／大人 3500 円・小学生 2500 円（幼児不可）

希望日／前日の 16:00 まで受付いたします

催行人数／2 名～4 名まで（1 名様の場合はご相談ください）

ご予約と集合場所／大沼合同遊船株式会社（公園広場内）

☎0138-67-2229

ガイド／小泉真（CST,TP チーフカメラマン）

大沼合同遊船 株式会社

〒041-1354 北海道亀田郡七飯町大沼 1023-1

TEL. 0138-67-2229 FAX.0138-67-3997 E-mail:yusen@onuma-park.com

<http://www.onuma-park.com>



photograph by Saeru

季刊 [アット・エイチ]

@h

vol.53 / ボラット新装刊
SPRING 2017

●発行人
池田 誠（HIF）

●編集人
中村ひでのり

●編集スタッフ
齊藤美悠

●デザイン
STUDIO LEAVES

●撮影
saeru

●イラストレーション
國立朋佳（表紙）
NAZU（本文）
H.Nakamura（本文）

●サポーター会員（敬称略）
稲泉省／鈴木詔次／前岡一郎
松本百合／川上 納／田中真一
山下淳一

●連載 & 編集協力（敬称略）
中川大介
長谷山裕一

●連載（敬称略）
西野鷹志
庄司 証
小宮伸二／押野友美
米田哲平／近藤 緑
夏井俊介／ふくだたくま

●取材協力（敬称略）
Y／K／宿村篤由
近藤博子／百合弘泰
田代陶子／ふくろうの家

次号は
2017年6月20日発行です。

2017年春号（年4回発行）
2017年3月20日発行
（一財）北海道国際交流センター（HIF）
【@h（アット・エイチ）】編集事務局
040-0054 函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660
E-mail volut@hif.or.jp http://www.hif.or.jp/volut/

禁・無断転載

[@h] 設置場所

【全店配布】ラッキービエロ/ハセガワストア/郵便局（一部）/生活協同組合コープさっぽろ/みちのく銀行/函館信用金庫/町会会館（一部）/美容室アイス

【本町・五稜郭付近エリア】函館市芸術ホール/函館市中央図書館/総合保健センター/北海道新聞社（道新文化センター）/函館YWCA/レストランバスク/ワーカースコープ茜/シネマアイリス/函館市青年センター/北海道教育大学函館校/Colz/Bees.Bee/函館短期大学付設調理製菓専門学校/クラブカット E' /おおわき整形外科/喫茶 Canvas/夏井珈琲ブリュッケ / ちいさなしあわせパン

【函館駅前付近エリア】函館市役所/工房虹と夢/Pizzeria AMORINO/NHK/千歳図書館/サンリブレ函館/函館駅前/バス案内・待合所/函館市総合福祉センター/百間

【美原・本通・中道・桔梗付近エリア】美原図書室/亀田支所/渡島総合振興局/EIKODO美原店/折谷組/水花月茶寮/ドゥ・アンジュ/花の湯/桔梗配本所（桔梗母と子の家）/ LADIGUE/ 珈琲物語 /Pizza and BIANCHI/チッチョ/バスティッチョ/Cafe en/公立はこだて未来大学/お総菜大地/文教堂桔梗店/三春堂/タイヤ館函館本店/亀田公民館/わつとな/ファイヤービット/おしま地域療育センター/ 函館葛屋書店 FUSU

【西部地区エリア】北海道国際交流センター（HIF）/Pain屋/ふるる函館/MOSSTREES/金森赤レンガ倉庫/FMLいるか/パル・レストラン・ラ・コンチャ/甘味茶房花かんろ/Old Miss 菊/ギャラリー村岡/次郎うどん/カフェやまじょう/ロシア極東連邦総合大学函館校/Cafeteria Morie/ハルジョオン・ヒメジョオン/函館市女性センター/はこだて工芸舎/函館市公民館/函館市地域交流まちづくりセンター/ROMANTICO ROMANTICA /Select Coffee Shop Peacepiece/ 和雑貨いろは/カフェ三日月 / TACHIKAWA CAFE Restaurant Maison/Cafe & Deli MARUSEN/函館園フリースクールすまいる/バザール・バザール/Cafe Classic/ マーキーズカフェ/箱館元町珈琲店 /カフェ Didi

【五稜郭駅・昭和エリア】Beauty Concierge AOKI/こじまキッズクリニック/港図書館/タマツ電機/北海道大学水産学部/函館市亀田青少年会館/Seak

【山の手・湯の川・旭岡付近エリア】旭岡図書館/銭亀沢支所/函館市民会館/湯川支所/湯川図書館/函館大学/函館短期大学/函館工業高等専門学校/山の手温泉/花園温泉

【北斗市エリア】北斗市役所/かなで〜る/LEAVES/しんわの湯/北斗市スポーツセンター/北斗市公民館/久根別住民センター く〜みん/七重浜住民センター れいんぼー/Coing

【七飯・大沼エリア】こなひき小屋/ななえ天然温泉ゆうひの館/七飯町文化センター/大中山コモン/ドゥ・エ・タンドゥル洋菓子店・マルス店/レストランピノ/宮崎鯉屋 /南北海道大沼婦人会館/カントリーキッチン/WALD/大沼国際交流プラザ/ネイバル森 /foufou/Studio Lumier/七飯町役場/大沼国際セミナーハウス / おおは製パン



いろんなこと、募集しています！

●【@h】はおおぜいの方々のボランティアによって支えられています。安定した運営のため、広告の掲載、または協賛してくださる方（サポーター会員）を募集しております。年会費は一口、団体／¥10000、個人／¥3000です。みなさんのご理解とご協力、よろしくお願いします。なお、広告の掲載料につきましては事務局までお問合せください。

●編集部では読者のみなさまからのご意見・ご感想、さまざまな情報をお待ちしております。お気軽にお寄せください。ご協力よろしくお願いします。

【@h 編集事務局】

TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660

E-mail volut@hif.or.jp http://www.hif.or.jp/volut/